

ヴィゴツキーの射程：プライベートスピーチ研究の実際

話題提供者 藤岡久美子（山形大学）

Domenic Berducci（富山県立大学）

岩男征樹（法政大学非常勤）

指定討論者 内田伸子（お茶の水女子大学）

天野清（中央大学）

企画者 岩男征樹（法政大学非常勤）

司会者 茂呂雄二（筑波大学）

【企画の趣旨】

ヴィゴツキー理論を実証的に検討している伝統的テーマとして、「プライベートスピーチ」に関する研究がある。これは、1930年前後の「自己中心的言語」に関するピアジェとヴィゴツキーの論争に始まるものであり、1960年代に入ってから、欧米を中心に本格的な実証的検討がなされてきた。これまで、1975年と1992年にプライベートスピーチに関する本が出版されるなど、多くの研究が蓄積されており、概してヴィゴツキー理論の妥当性が示されている。それらの成果を踏まえ、後の研究者たちは、ピアジェ理論に基づく自己中心的言語ではなく、プライベートスピーチという用語を用いるようになった。

ヴィゴツキーによると、最初はコミュニケーションの道具として獲得したことばを3才頃から自分に向けて思考の道具として用いるようになり、やがては小学校に入る前までに音声は抜け落ちて内言へと移行するとされている。この点について、現在もなお、研究は続けられ、従来の子どもを対象とした検討以外にも広がりを見せている。例えば、内面化以後の児童の教室談話や成人を対象とした検討、第二言語習得時の発話や高齢者のうつ病のプライベートスピーチなど、発達心理学だけにとどまらず、教育心理学や認知科学、臨床心理学からの研究も多くなっている。このような現状を踏まえ、様々な領域や対象における知見をもとに、あらためてヴィゴツキー理論を鑑みすることは、理論的にも意義があると思われる。そこで、本シンポジウムでは、各話題提供者にプライベートスピーチ研究の実際を報告していただき、ヴィゴツキー理論の今後の可能性について議論してみたい。

【話題提供】

幼児のプライベートスピーチ研究の実際と展望

藤岡久美子（山形大学）

幼児期から児童期前期の子どものプライベートスピーチに関する実験研究は、1960年代以降、欧

米を中心に盛んに行われた。その一般的な方法は、子どもに認知的課題（パズル、絵カード配列など）を与え、課題従事中の発話を採取し分析するものである。

ヴィゴツキー理論からの検討課題は、主に(1)プライベートスピーチの発達的变化、(2)課題困難さとプライベートスピーチの出現の関係であった。プライベートスピーチの生起が実験場面の設定の影響を受けやすく、実験場面で得られるプライベートスピーチの量そのものが自然観察場面のそれよりも総じて少ないこともあり、研究の初期には、一貫した知見が見出されにくかったが、Frauenglass & Diaz(1985)に至って、プライベートスピーチは発達に従って増加した後減少する山型の曲線をたどることと、困難なときほど生起することが一致した見解となった。

Diaz(1992)が述べているように、その後の体系的な研究は少ない。しかし、上記の2点の実証をもってこのパラダイムのなすべき課題がおわったわけではない。ヴィゴツキー理論が発達研究に与えた様々な示唆については、まだ検討すべき課題が残されている。スピーチの注意や統制の機能は、emotionalな側面に対してはどうか、ADHD児のように注意と行動の統制に問題を抱える子どもの場合はどうかかなど、今日、発達心理学の重要なトピックに対して、示唆するところは多い。それにも関わらず、プライベートスピーチの研究は方法上の困難さを多く抱えているため、活発にならないのが現状であろう。

本シンポジウムでは、伝統的パラダイムによる研究の実際例を紹介しながら、上述の伝統的な認知課題を用いたパラダイムにおける長年の問題点であるスピーチのカテゴリーの問題に言及するとともに、今後の発展の方向性を探りたい。

文脈の中のプライベートスピーチ

Domenic Berducci（富山県立大学）

現象としてのプライベートスピーチはあらゆる角度から研究されており、特にヴィゴツキーに連

なる研究の流れでは「外界にあるもの」が精神内へ変容する分岐として主要な概念とみなされてきた。

本研究では、理科の授業中、数人の生徒が見せたプライベートスピーチの発達と機能に焦点を当てる。やりとりの発達を、短期と長期の両側面から照射する。短期の発達では、1時限中に見られた、個人や数人単位でのプライベートスピーチの変化を検討する。また長期の発達では、1学期間に3度に渡って実施された理科の解剖課題に関して、同様に検討する。

プライベートスピーチの発達と機能を明らかにする上で2つの道具、すなわち文脈分析と会話分析を用いた。前者から、いかにしてプライベートスピーチの「やりとり」が授業のやりとり全体に埋め込まれ、またそれを編成すべく機能するかを示す。会話分析から、いかにして生徒たちはプライベートスピーチの「ターン」を積み重ねて編成するか、またいかにしてこうしたターンがその瞬間に生徒の行っていたことを露見させるかを明らかにする。

大人の独り言の種類とその発達

岩男征樹（法政大学非常勤）

従来の研究では、主に子どもを対象とした検討が中心であった。それは、プライベートスピーチは小学校に入るまでに内言へと移行すると指摘されていたためでもある。しかし、大人でも実際に独り言は言うことがある。それは子どものプライベートスピーチとどのような関係にあるのだろうか。ましてや、大人の独り言にはどのような種類があるのだろうか。これらの点について検討することは、内面化以後のこぼの発達を明らかにする上でも意義があると思われる。自由記述法、自己サンプリング法（記録用紙を常に携帯し、独り言を言った時点で記録）など、自己報告により日常の独り言を収集したところ、大人では、当該状況で行っている活動に伴って突発的に生じる「状況的独り言」と、当該状況での活動とは無関連に内的活動の反映として生じる「脱状況的独り言」があることが分かった。さらに、場面を限定した実際の発話（音声）の検討では、状況的独り言はネガティブな感情表出として、脱状況的独り言はニュートラルな思考として生じることが多かった。プライベートスピーチは知的機能を持つ状況的独り言であると考えられるが、大人ではそれらはすでに内面化されているために少ないと考えられる。

また、質問紙による検討では、脱状況的独り言はニュートラルな思考として生じることが多いにも関わらず、うつ傾向と相関があることが示された。このことは、それが知的機能を持ちながらも情動と深く関連していることを示唆している。一方で、ロボット作成キットを用いた個人条件と協同条件の比較では、協同条件での独り言は知的機能というよりは、他者に自分の状態を伝えるための社会的機能を持つことが考えられた。しかも、それらの発話は普段日常で脱状況的独り言を言いがちな人ほど多いことから、対話の場からトリップして独り言を言うためには脱状況的独り言の発達が関係していると考えられる。以上より、独り言の発達は、①対話、②対話的独り言（1人でテレビに向かって話すときのように、本人はコミュニケーションのつもりだが状況的に独り言といえるもの）、③プライベートスピーチ（自分に向けた知的機能）、④脱状況的独り言（内言の獲得とともに脱状況的な内的活動が可能。単に知的機能というよりは情動も深く関連）、⑤対話内独り言（対話の場からトリップするが社会的機能を持つ）の順に生じることが示唆される。

【指定討論者より】

内田伸子（お茶の水女子大学）

「プライベートスピーチ」はことば（言語行為）の思考を担う側面を指し、公共的な伝達手段とは異なる様式をとる。ことばの様式は両機能が融合した発生段階から思考の漸次的構造化に伴い内言（表象）に至る段階に移行していく。ある思考活動が生じる状況や特性に依存して内面化の来歴を遡ることが自在なダイナミックな働きである。この観点から個々の研究の意義と適用される方法論の妥当性を批判的に検討して討論に臨み今後の展望を得たい。

天野清（中央大学）

幼児・学童期の諸心理機能の全ての新生と再構造化は、すべて内言の発達と関わる。しかし、プライベートスピーチは、内言発生期だけでなく、学童や大人でも、種々の状況で出現しうる。活動理論の立場からみると、それは、活動の動機づけ、目標の探索と設定、計画化（プランニング）、思考の実行、行為のコントロール、調整等の機能を果たし、したがって注意、記憶、情動面の機能や上記の諸機能の賦活化にも深く関わる。このような立場から話題提供者にコメントを述べる。